



へ13 待  
459  
31

消  
藤  
兼

重修真書太閤記四編卷之十

木下藤吉即室町殿へ參上の事

并宣旨と重んじ三家和睦の事

淺井朝倉山門陣と取織田方山下陣して對陣既ふ九

月より十二月及び敵味方とも氣疲と勢弱とこの弓箭

の道と重んじ武勇の名と惜て嚴霜の晨朝ふ馬と馳て田

頭の賓雁を射寒風の黄昏ふ篝を焼て長陣の憂を

めと川木下藤吉即秀吉へ對陣たとひ年と重ぬと

も其詮あるへうと察知し早く退陣あり

て然るへさ由を勧め奉うびるよ織田殿一戦あるも

同  
會  
政  
印

太閤記四編卷十

及く引退くんとしうも残念なりと仰らる  
ふらう木下一計を獻し淺井朝倉を欺て山門  
呼下し一戦して首数多く打取しと譽とて凱陣  
あるは武勇薄に似たり是儀如何と云ふ木下藤  
吉即ひとうよ上洛し東山將軍塚なる室町殿の御  
陣へ參上しけし義昭將軍御前へ召し坂本宇佐  
山の体と御尋ありと木下り計畧の今又始と勝利  
と得しとと御感ありけし秀吉御座近く進  
う謹て言上しける様い淺井朝倉の兩家山門を攀  
上り根本中堂を本陣とて谷々院々兵士を宿

し鎮護國家の祈禱料を兵糧充てし事偏ふ大衆師  
壇の好と重んじひ起るといへとも抑我慢偏執  
の所為と申へ一實の神道は背と三千の理は違  
へり角て年月を經ひて佛法興隆の靈境刀  
杖堅固の戰場とらう王法衰へ顯密の學の窓を  
閉慈悲廢とて瑜珈の教の扉を鎖と實に哀むへ  
歎くへさ有様とらう行ゆと山門自滅と招くへ  
めと可申いと比叡山に王城守護の伽藍ありて  
宝祚長久朝暮祈禱の勅願を奉と一朝よと是を  
改易とんと豈惜うと秀吉この事と深く歎  
厚く哀む故に恐を顧み悼を忘とて御耳を驚

仰奉る意趣あり仰願く禁中の御沙汰を經て山門へ宣旨と下され衆徒等も武士與力の志を變へ一念三千の學問を勤むる由を施行せられ淺井朝倉への將軍家の御教書と以て僧坊も宿陣とて武勇の道も背く旨を嚴重に御下知れ自然と淺井朝倉も陣を拂ふ本國へ下向し信長も心ゆく濃州へ罷歸り可申しと言上し將軍家聞食最の事なり急を急と取計ふる由仰出さし傳奏衆を以て慮と伺ひ奉る木下申旨道理至極と早く山門へ武家と扶持し勤行を妨ぐる憲法に違ひ鎮

護國家の淨財を費し修羅鬪諍の禪とあを佛法興隆の本願を蔑如し宝祚長久四海靜謐の勅旨を等閑し衆徒の所業甚以奇怪あり早く淺井朝倉一味の約を變し一心三觀の淨業を勤む者天氣如件と仰下されける山門の大衆も慚愧のたれひを起し勅旨を以て淺井朝倉に示し此上の山上に留め参らざる違勅の恐るをいあはし師檀の好い去とちりし勅命を據りて申ける處へ室町殿の御使として上野中務大輔景忠登り山に淺井朝倉ののこし仰遣はされり越前國に御勤座より歸りける時義景の馳走し奉りし

今よ於て忘しむるをいふに淺井事も矢嶋野に御座ありし時、盡くし忠節拔群なれり。然者、兩家よ於て全く踈意おくり、因て思召のまゝと仰出さるるに、抑兩家信長と宿意ありて、確執よ及びい事武邊の意地互よ弓箭の道あり。是よ何とも仰出さるるに、あはれに但兩家とも、山門に陣を取り、事の意を得るに、僧坊へ柔和忍辱の処、天地風雲の陣を張るる地よ、あらは三塔の慈悲哀愍の砌、殺伐鞭笞の場よ、あはれ處も多きに、何なれに我立、拙小攀上りて、戦場とあると計るるの不思議さよ、速よ下山して

本國よ歸り、信長との弓箭へ山門に於て決るるよ、及ふへ、若又武命と輕ん御昔よ從と、別の仰出さるる題目もあはれと仰下されし、うに淺井朝倉兩家もあはれ塩合とあはれ、いよ異儀を申し及るに、謹て御教書の旨よ從ひ、早歸國仕るへ、由と言上り、上野中務大輔に御使を勤め、氣色をうて、京都へ引返に、流布本秀吉の辨捧腹よ堪はれ、川山門の僧徒に、將軍柳營の指揮よあり、今の時とあはれ、これゆふへ、淺井朝倉よ、信長と和議と結び、と淺井三代記等よ見之つと、信し難

大岡巳四編卷十

日

又云流布本より日野大納言輝資卿を以て傳奏と  
して宣旨と申出したるのとあはれとも誤りなり輝資卿  
慶長十二年五月廿日出家唯心と号し時年五  
十三と知譜拙記よりえたり然し元龜元年ハ  
十六歳なりといふは納言より昇り玉に中より去少  
年の人を以て如斯くと謀らるへげんや依てふ  
と改削と

又流布本より十二月十日二階堂駿河守室町殿の  
御使として三井寺へ入來あり信長これを迎へ  
奉りて淺井朝倉と和睦あるは由と仰らるる  
信長上使に向ひ謹て台命と承るるは申す

以て綸旨と申御教書と申信長争てり異儀を申  
へるは併信長寒氣をいとくは對陣仕の事私の  
遺恨と暗とて為しはた天下万民と  
て王命と武命と知て君臣上下の道を明らるるを  
ゆるぎ存する故とて因て綸旨御教書と尊  
敬り奉り義景もこの以後公方へ忠節を盡  
し朝廷の禮儀に違ひひやると眞實な志を改め  
ゆるらん然者信長何を以て否と申へる若又此  
度よりうの義とて後々違變の義ゆる信長  
さ秘して奏聞言上及くは直に罷向ひ踏潰し申  
とへるは先義景長政に仰聞られ本心を御

糺明の上盟約の證とや一度いと返答ありし  
 二階堂駿河守最の事なりとて三井寺より直に  
 山門へ上り義景長政の所存と承り糺とて  
 とて参向あり勅定の趣と將軍の御愛の次第と  
 述らしむとい義景長政承り恐ある申条とい  
 へとも諸士との外隨從の者ともへを一應申聞  
 をその後御返答申上へとていと申て上使を  
 陣中又留めりてり奉り長政ちめ一族家老  
 うち寄評定とてい川も退屈の折節おれ  
 和平して本國へ引返さんいと然と申川  
 あり朝倉式部大夫景鏡一人進出て申ける

斯の如く無益の對陣数月と經ゆ本國の仕置  
 とらち捨いと本意は背さし間勅定は従ひ武命  
 小付て和平と結ひ本國へ引返しいと幸の  
 こといへとも信長へ表裏の人といへ此度の  
 寒中といひ遠國といひむらく困窮仕るゆ故  
 に如斯い計らひいと存せらむといふ春に  
 到り雪も解道も平らくなり成申さん時必定出馬  
 して今度の遺恨を晴さんと企ていとさう然  
 へ今日の和平との詮らむに似たりとて盟  
 約を堅く仕り向後違變あるまゝとの證據分明  
 といへといふ勅命と武命とに從ひ然とて

大問巳日編

いと憚る所もなく申しとへ長政も何さ景  
鏡の申さるる處透間なく存い信長の表裏反覆  
たのと難うことい今ふらぬ事よてい論旨  
ともい御教書ともい此度いりり和平をか  
して信長美濃ふ引返し明年必定打出いんこと  
更に疑ふへさいあう然らう信長も勅定  
と武命とを以て和平し後よこれを背うとあま  
違勅の朝敵の當方より言上し勅定を以て征  
伐せんよ味方の名義正しく武威よ盛なる  
陣して日せうさぬ月を過し領國の仕置を捨家  
如斯在

中の成敗をうへうみさるる本意もゆえに因  
て無益ふ長陣せんこと然らうともおのれを  
くゆ勅定武命ふ任せ和睦の義奉畏む返答  
なす奉り一旦帰國あまひの上りよ表  
裏第一の信長もや當ふ論旨と御教書ふ  
恥て面々の國へ手出しもあま存い然者  
その間よ味方の兵士を能々調練し甲冑と繕ひ  
弓箭と制し然して時節の至らんと待べくい  
盟約も誓書も取替を及ふらうを某うて  
先達て幾通も差越えていへともその誓書更に證  
ととるよ足びい間先達て返し遣らういひさ但



此度和平のありしに誓書あつても陣中一同の  
安心仕るまじくいへり誓書取らる可然いと  
申けるも義景も長き思慮と廻らとに及ん  
に眼前の安逸との意とて一旦本國に歸ら  
んことを悦ぶあり長政以下同心の言葉に從ひ  
上使を請じて丁寧の饗應あり奉り即上意に任  
を和平仕ふへし後日とも違乱に及ぶま  
じく奉存あり互に誓書と取り申度いと  
上へいひし駿河守孝秀尤の所望なり併勅定と  
いひ武命といひ何とて信長違違申さるへし其  
段の心安くすべし但和睦の印なり今國中の

下々安んず安心ありしに間此旨を以て取  
扱ひ信長より誓書を贈らるるに間當方より  
も神文を以て約定ありしに御下知あ  
らん時誓書と取り歸陣し因て  
おの誓書と整おと申沙汰に駿河守ハ  
山門を下り二度三井寺へ趣き信長は義景長政  
の返答と申通し京都へ歸り將軍家へ言上し此  
上へ信長より神文を以て和睦の義申遣はし  
へし事神速に調ふへしとの義もてめを  
使宇佐山へ下向し神文を取替し和平とすへ  
る由仰出されけるに信長の義景さへ得心して

大陽言... 異儀と存とさらんは此方より何とて別心ある  
へるや然者神文も及ぬことなる上意とい  
ひ先方の所望といひ信長これを拒むべきは非  
と謹て承知仕る由と答へ奉りし上使より  
朝倉へも信長得心の旨と申通せらる同月十三  
日信長淺井朝倉互に神文と取交し和睦の首尾  
全く整ひしに即日上使へ京都へ引返しけ  
るや淺井朝倉等恐怖の疑心を解んため信長ま  
川陣拂あるへと定められしに信長打笑  
ひ寒氣よ疲と味方の兵士と早く引上て先へ  
歸國とんと此方の勝手なる災却て幸とい如斯

事とや申へると宣ひ諸將の陣々へ和睦調ひ歸  
陣の由と觸られ翌十四日の曉志賀の宇佐山  
と引拂ひ船よて湖水と渡り瀬田へ着船ありけ  
るや山岡美濃守待迎へ奉り休足ありしに  
朝倉も十五日辰の刻に坪笠山と引拂ひ直に  
越前へ歸國し長政は小谷へ歸城ありて加勢の  
ためよ登りし諸侍もとのう在所へ引返し憂  
ゆる長陣の苦とこれに新玉のころと迎へ  
んと悦ぶるとあり此条尤不審なる信長岐阜  
一歸着ありしに十二月十日をれに十二月十四  
日瀬田と渡りしにこれなりしに日時と就て

Nobunaga Da.

Tokugawa

の疑らう次上使往復の事武威も勅定も至て  
 輕率と云ふ勿論この時王道衰微しはを  
 共如斯いあるや將軍家とりへとも信  
 長の意中しう出て噉ををある時宜や何と義  
 景の心中と再應し糾明し及ふらんや因て此  
 条と取を山門の舊説しうて改作と  
 醫王善道擁護の皆と廻らさしける故あるし山  
 門の衆徒淺井朝倉與力の志を改めしうて  
 ともふ何様六万餘人の勢を以て修學勤行の僧糧  
 と費し長陣と張りあし心なきに似たり然者早々  
 下山し本國へ引返をし勅定如斯武命もや黙

止かてさう信長理不盡し追慕ふへさあ  
 びとて義景長政とゆるし山門を下り椽生越ふ  
 めし本國へ引返し信長勢これを慕ふ  
 んとめりふとも山深く道嶮し容易し追へ  
 らぬあぬの朝倉の心安く朽木谷より若狭の熊  
 川へ出て越前へ返り淺井の椽生より高嶋の城へ  
 入今津海津を経て小谷へ引返をこの山道へ信長  
 の本陣よりくるめし隔り川るより跡を追ふへ  
 方便ありし山門の衆徒し好む  
 ありし兩家を馳走し開闢以來八百餘年  
 及び靈寶を活却し院々相傳の私領と質物と

六月己巳編卷十

十

て兵糧を賄ひしめとも六万餘の大軍なればその  
費用の容易さともあらずは是時より山門の僧坊  
ら困窮し及ひしとちりしれよ木下ウ奇謀も出  
ふと云ふる浅井朝倉も遠慮あくして謀ら  
せざるあとの云甲斐ある勅定よりして山門變替  
あつて速く三塔の陣を和途堅田より高島伊黒に  
移し野田福嶋の者ともと牒し合を今暫く對陣を  
へ織田殿より困窮ありむふへく士卒寒天も苦  
むおとい味方も同しとあらず浅井へ自國あり朝  
倉へ山續はに本國へ道近し兵糧運送の便ありそ  
の間は攝州より三好黨切て上り石山門徒爰りし

こころ討出の織田方より猛しとも終りの敗軍  
しつへさの両家滅亡をへ前表とあそいしられけ  
信長の宇佐山より上洛あり室町殿へ出仕  
ありて御愛の辱しを御禮申上られ直に京都  
と發足し瀬田に休息ありむひ長光寺觀音寺山等  
を巡見ありけるよ佐和山押えよ置し丹羽  
五郎左衛門尉長秀待迎え奉り百々屋敷に於て一  
獻を用意し木下あ御暇下され横山の城へ還入  
しけし信長の摺りし峠を打越番場醒井柏原  
今須關原を過て樽井赤坂御影寺江渡より長柄川

百年 方橋 朝汐  
*Tamaki Kanbe Niwa Isuro*

表 表  
 金人 津 朝 朝 汐 百年

重修真書太閤記四編卷之拾一

神戶藏人具盛隱居事  
 并丹羽長秀磯野降參と執成事  
 桓たると虎の如く貔の如く熊の如く羆の如く  
 とい武王乃將士を戒め牧野の誓言あり織田彈  
 正忠平信長若年より勇猛拔群よめて四方の敵と  
 切鎮め尾州三郡の領主より起て公方家と再真し  
 奉て天下執權の重任と掌り握り其威風の加ふる  
 如伏せどと云如あし就中元龜元年春より冬追越  
 前表の取合難義の軍あれども遂に勝利と失とせ

重修真書太閤記四編卷之十終

以傍て岐阜へ還御あつて明る年をとりてとて  
 ける

あつてその年の暮に至り淺井朝倉と坂本の對陣  
を極寒の節及び兵士凍餒一大事の退口ありし  
も無事に帰國ありし併木下藤吉即秀吉の智畧  
と云べし越前乃退口ら秀吉一手と以て後殿をか  
三萬餘の大敵と追崩し奇謀と馳て信長の歸  
路を安く其身長濱の城主として能百姓と撫育  
し居あがり敵と苦しめ姉川の戦より信長の旗本  
に在て磯野丹波守が猛勢と切靡け横山の城を掠  
奪と其奇策妙計やこんど凡慮み及らば如斯謀主  
を帷幕の中又厚く用ひあふが故に信長桓の銳  
氣を逞くして向ふ処敵あさか如し其年も暮て

元龜二年とありけり信長居城よて緩々と新  
ら春と迎へ花鳥の餘情と娛しむと偏し秀吉の智  
謀み因所なりと重く抽賞ありあふ爰も勢州乃神  
戸藏人具盛の先年信長らめて勢州出馬の時山  
路彈正が誘よりて織田家も屬し信長の三男三  
七郎と養子と一家督と譲らんと約し川とさむ元  
來神戸の一族關安藝守盛信の子と養子とあそべ  
しと約定ありし処ある如斯しうは關が子浪々  
の身とちうしとを内く不快ありへら信長の  
武威に恐きて色よも詞あも出さねと關と神戸と  
不和よどなりしにさる又高岡の山路彈正一旦ハ木

下藤吉郎の游説は從ひ信長に歸伏あり、うごも  
情信長の所行と伺見に未憑し、ぬ事多く世上  
の噂は表裏の大将といふと宜なうげと思ふ  
より何しう變心を生し神戸具盛も如何し  
三七郎の心より實父の許へ立歸るべし様為  
と諫げしに具盛實もと思ひあがり斯事仕損  
は信長の怒を生し却て眼前に禍を引出さべし能  
能謀慮を廻さざんを叶ふまじと種々に計ら  
ふむごも何しう三七郎と具盛と父子の際睦  
らひありしに信長の方へも薄々漏聞えし  
ごも暫時へ不知躰めて捨置とるるは三七郎より

委細に養父と山路彈正との計畧と注進ありし  
は信長心中に怒と起され此方にても又時もあり  
はと窺われしに神戸藏人具盛夫婦もろ共舅  
ありける江州日野の蒲生下野守貞秀入道の許へ  
年始乃禮として立越るを信長聞召し幸の時節か  
るごとく貞秀入道の長子右京大夫賢秀と召れて神  
戸夫婦と暫時日野城中に抑留置べし旨と仰付ら  
るごとく破河内守菅沼九郎右衛門尉兩人を  
御使として如何あれは近頃三七郎と疎畧し仕  
やめし家督とあるべき器量ありと思ふは何  
白地し訴へやとあるや一旦子とあり父とありな

めく三七郎に不快と云ふ父子の親に背き信長に  
 對し後闇致方と云べし具盛の心中如右ある故一  
 族旗本中いづれも三七郎に對し疎畧の振舞を  
 と聞召此事疾より御聞入達をいづも終に思返  
 せしものやと寛宥の思召せめて捨置をいひ一日  
 に増無禮の事川のあり三七が近侍の輩より告  
 來より三七不器用あり其子細明白より告  
 左もあつと全具盛が油断と云べし然る信長が  
 安堵のこめ且き一族旗本の面々のためあれば具  
 盛隠居ありて家督と三七郎へ譲らるべしと仰出  
 されしもの具盛大に怖と陳謝の辭ありける

いんきょうとて畏ういこ御請けし信長聞  
 召其儀あらば早く取計ひて中旨と捉あふより  
 藏人仰は從ひ隠居ありて家督領知財寶一川も殘  
 らば三七郎へ譲りてけりめくしてのち信長  
 心とてい落居あひあが猶開けめと畏々も  
 ああよよの竊に實否と探りて山路彈正が勸  
 なるより明白ありめ信長大に怒り終ひ彼の  
 勇猛なる武士ふれば始終謀叛とせざる者と兼て思  
 む川の果して左様の企とありめなるより早く除  
 せむん必後日の憂と釀をせしめて高田孫右衛門  
 尉と御使とある山路と神戸の城中に招き腹と



切せぬ其外彈正一味の輩百廿餘人の領知を没  
 収し追放しぬむければ残る諸士色々急状を奉り  
 三七郎に帰伏したうけを如斯後の神戸一圓三七  
 郎の領事ありてあるを無異に屬を又北畠殿心  
 今年夏養女と茶筧磨嫁らと婚禮の規式とて  
 後大河内の城と譲らるつら勢州全く織田殿の旗  
 下となりみたり  
 茶筧御曹司信雄の北方に北畠權中納言具教卿  
 の第五乃姫あれども新御所信意の養女として  
 婚姻ありしなり茶筧丸今年十四歳信意に廿歳  
 なり

叔又木下藤吉郎の坂本退陣の後横山城に住し如  
 何ものして浅井朝倉の両家より和睦を破る軍を  
 起させんと謀を廻らしけるが鬼角浅井家の諸士  
 と味方し歸伏あさむる如しと思ひあつ佐和  
 山の城主磯野丹波守の舊冬より織田家に帰降の  
 色あるあり早く此者と手に入らやとありひ竊  
 ん百々屋舗に至り丹羽五郎左衛門尉に其意を示  
 し合を秀吉に横山に歸りけるそのうち丹羽が私  
 の使者を以て佐和山の磯野が方へ遣しける  
 當時浅井朝倉織田の三家和睦とてのひける上  
 らやく信長と入魂しるされりべし信長御邊の武

勇と憑りし者と思われ數公方家へ言上ありけ  
 るふ公方家もて去者ありと兼てし聞召及を  
 且川と御沙汰ありしと承るる早く御思案ありて  
 將軍直參の列に召とあり將軍より仰下さしんふ  
 淺井も何り否しむと家と興し譽と子孫に貽され  
 ん時既に至りてゆべしと中勧めけし碓野元よ  
 り織田殿と慕ふ心あつさめ上は將軍直參の列に  
 らんと瓜年來望し居たる処あれば丹羽が使ふ實  
 に御吹擧を以て本意の如く將軍家も參上ありし  
 くの涯分の忠節と竭し中へ此末ありし取成  
 るるべしと返事しけし長秀此むねと木下に

中送る秀吉やめく長秀よりおの碓野が瓜岐阜  
 へ中遣しゆへ其後某岐阜へ參上して手段と盡を  
 成しと埃抄より長秀即日使と岐阜へし  
 らせて碓野が降參と京都伺公の事と言上ふ及び  
 あり

木下藤吉郎遠慮の事

并淺井家諸士追く降參の事

丹羽五郎左衛門尉長秀の使者岐阜より來着し碓野  
 丹波守降參の事と言上しつる京都直參の首尾取  
 持せらるしと請けけるふし信長聞食降參へ神妙  
 あれども公方家直參の列に加へられんとい過分

八門二日隔六十一

六

あり何と功とて免許あるべしと心得を氣に  
 あつては速に召出され何事にも罷出さず心  
 許あつて仰らるれば秀吉中上げる様磯野丹波守  
 が降参のこに付て一計は存出さずと仰り参上  
 仕は長秀の何と申上りひひとやらんと問奉るに  
 信長それい其事あり丹波守降参のこに尤あれど  
 も公方家直参の列に加へよとい心得を仰られ  
 し秀吉承り左を仰られんと存しひひ川原  
 よより態と伺公仕りて其故の磯野降参を  
 のこにゆへに何の子細もいへぬと佐和山の城

と開させ彼を外へつと佐和山へ味方の兵士は  
 籠浅井が手の諸將の肝を挫ん方便しては城持と  
 彼の心恐怖して两端を懐くもの多くありゆへに  
 浅井父子怒りて掬えうの是非なく手出し仕るべ  
 く因て磯野が佐和山の城を棄らんよと彼と十  
 分小悦をせよと申すなりと然るに君の  
 仰らるる丹波守降参神妙と思召あつて公方家へ  
 言上ありて公方家も満足と仰りて新  
 に高嶋の城主よある本領知の分西近江あて下  
 都便宜の御用を勤むべしとありて丹波守悦びて

大岡政談四編卷十一

神速は西近江へ移りやべし然して佐和山へ御勢  
 と入置をむろし浅井ヶ領分への川と狭まり味  
 方の境域を拓する道理よめてゆたさへ本領より  
 加増ありても高嶋と佐和山への替物よめてゆべし  
 此義使を以て言上をんふ計漏るゝ万車の妨よて  
 故參上仕りてひとや上げらるゝ信長たちま  
 ち得心ありしは何様をゆく其事を取行ふべし然  
 らば長秀ヶ許へも請申よろに取持をぬふべし由  
 を仰下さるゝと有しとらるゝ秀吉も畏れ昔御請  
 中て即時に横山へ引返さるゝとて百々屋敷へ立寄長  
 秀と岐阜よて信長の仰られし趣と語を合をける

Handwritten red mark or character.

処へ信長の使者來りて公方家直參の事免許あり  
 けるありし長秀從者ららるゝ五六人召具し佐和  
 山へ趣さるゝと案内をゆめ丹波守速く出迎  
 む本丸に請入て對面を時長秀申けるに兼て  
 より申さるゝ昔は從ひ岐阜へ言上よ及ぶの処信  
 長深く感賞ありて公方家へ披露ありし將軍も  
 も悦び思食高嶋の城は本領知のまゝ下され昵近  
 の列に加へらるゝとの御淀の由信長の書状如是  
 と懷中より取出し丹波守は渡りられ丹波守慎  
 ん項戴しそれを披き見て大に悦び年來の本望成  
 就せしこと偏に御邊の取あり信長の吹擧ふられ

然ハ片時も早く新思の高嶋へ引移り公方家御禮  
中てのち岐阜へ参向仕ふべし就ては當城御邊へ  
渡り申す間宜しく計らひ申さるべしと禮謝し  
及びけるに長秀も心中に秀吉の計策の的中  
を驚きこと驚き事なげく開城の日と約して百々屋  
敷へ歸りけるが磯野の公方家の直參の衆を召加  
えられしに過分ある高島の城を賜り本  
領知を其儘に得替ありしことを悦び同廿四日佐和  
山と丹羽長秀引渡り手勢と引率して西近江へ  
入部を長秀佐和山と請取り昔と岐阜へ言上した  
りしかば信長も悦をを申ひ則佐和山の城も五

万貫の領知を添て長秀に賜らうけり長秀を  
ち百々屋敷らう佐和山に入替り此事小谷へ聞え  
けり長政大に怒り諸將見懲りの為とて丹波守  
が老母の七十に餘りて人質のこめ小谷の城にお  
りけるを引出しあれを殺さんと云けるを安養寺  
三郎左衛門尉諫て申けるに丹波守事織田家は降  
参するともいふとも老母の此方にあるうち強く  
敵對するところあるべし然るは是を害し後を丹  
波守弥憤り仇をあらはと深るるべし漢の王陵が母  
虜にして楚もあうけるが我子に忠義を盡させんた  
め自害せし例もあう磯野元らう味方深るる

みふけれバ一旦織田家ニ降るといふ共我君其母  
 とよく勞了終るも磯野もささぐ恩愛より引さる  
 たび思ひ返るともあまべ願う能々賢慮あ  
 るべしと詞を盡して諫めしども久政長政父子  
 共怒り堪う終安養寺が諫に従ふ終磯野  
 が老母と磯野の無慚なれ三郎左衛門力  
 なく淺井家の運も是れであらう大将小仁義の意あ  
 しいめでり長久あることを得んとて天に仰で歎息  
 あたりけり丹波守の老母の殺されしことを傳へ  
 聞大に悲愁へくちける我元より淺井の臣にあ  
 らば旗本小屬してまゝく功ありと云ども其恩報

もなり是が為謀るといへども用ひらざる然  
 我今公方家小直參とするもいさか思ふとあるが  
 故なり殊小此項の織田淺井和睦して敵味方と別  
 せしふあつたも若万一織田淺井弓矢及ぶと  
 あつて我公方家言上し台命を以て危急を救え  
 んに難めらト然るも長政不仁し我母を害を  
 しとめらとて此怨不日おわくをせしむべ  
 るのよと小谷の方と白眼川を奉て握て怒りける去  
 程に木下藤吉郎は佐和山の城味方の持とあり殊  
 に丹羽長秀城主とありし心中は深く喜び長  
 秀と談して淺井方の諸士を招き種くよ心を取け

Tawayama

忍左衛門といふの三百餘人よて成居たり  
 礪野降参して城を開き却て高島の城と  
 公方家より拜領し外間實儀羨よしとて  
 云づ其上丹羽佐和山よあを信長の威光あを  
 勇を猛しく小勢よて籠城叶ふま早く身の安危  
 と定むざとやあひひらん早く城とひらきて小  
 谷へ退さけとあまの朝妻の城よ新庄駿河守  
 が五百餘人よて籠居たりけむと味方よとを  
 とあひひ佐和山と間近のよあれば何うよ付て親  
 しとあまのの上丹波守と以て駿河守よ利害と

使者を遣り佐和山の織田方の持城とあり大尾  
 と開退たる中よ某一人何とて當城と成課をい  
 べき急ぎ御加勢を賜うけり若遅きの御沙汰か  
 らんよ開城仕りゆべと申送りけきとも長政  
 父子只今敵の寄よあもあなれよ諸將のめく臆を  
 るあいらなるよあなれよ若遅きとて加勢の沙汰  
 も延くよ捨おうれけるあまの駿河守よあをあら  
 んどよめと打笑ひ今い憚る処ありとて城を開て  
 織田家へ降参したうけよ木下丹羽あひよあなれ  
 仕とあなれと互よ喜び合大尾淺妻のあなれ城へ

大隆記四續卷十一

十三

兵士を召掛け成らむその昔岐阜へ注進したる  
りしに信長悦喜めさうなく佐和山大尾淺妻三ヶ  
の城たやそ味方の持と成しと當春の物をト  
めよしとて木下丹羽の兩人へ感状とあせられ  
殊に秀吉の謀畧よとに囊中の物と探るよ似たり  
奇代の名士のなと最頼りしく思われたり

重修真書太閤記四編卷之拾一

重修真書太閤記四編卷之拾二

淺井長政横山へ使者と遣を事

并秀吉鎌の刃城後援の事

妄語詭言ら十惡の一にしして佛埵の忌む所なれ  
共兵と用ゆる者詭言と以て敵と計るに神明佛陀  
却て擁護の毗と回らさるるに方便智力と云ふもや  
然るに織田朝倉淺井の三將東坂本と對陣して  
士民の困窮大形あらさるるに木下藤吉即ひとらふ  
思惟熟考して將軍家と言上し三家和平の義を取  
結ひ違變有するに誓紙と取のるに各帰國ありと



云とも元より本心の和睦ありしに淺井朝倉の嫉妬偏執ありあつて織田殿は天下の為に行くとらして方便あれば誓紙の詞は背けいふも神明と罰しむるに要盟信ありといひめくことややべと去程は丹羽木下が謀計盡くの中は淺井の持城三ヶ所たやそ織田方の者とあり磯野丹羽守新庄駿河守等降参しめだ淺井父子大に怒り憤り信長の表裏今又始まることあぐり誓紙を取替へて間もなく盟約は背らめこの如く味方の諸城をとり取ら奇怪あり此上は朝倉と相談し此方より信長が盟約違變の罪と責其返答は因て軍を起さるべ

し横山の城は程近し姑此城へ中通むべしとて使者と木下の許へ遣りし信長及び我等坂本に於て勅定しむる台命といひ止事を得ば三家和睦をか以後別儀あるべしと誓書と取替へてその墨いしと乾うざるみり川に約定と變じ我旗本の輩とせり欺る諸城を押領せられんと不義無道の所業ありとや若初より偽謀にて行ふとされしことありば此方よりも約定を變じ明日もあは軍馬と發し運を天道に任せし定めし信長もを此程の始末と知て下知せらるるあり然らば勅定は違ふ台命に戻る其罪輕めらるる朝倉と

大隆記四編卷十二

中合せ急度糺明あきらめふ及ぶべしとやけりしより木下  
 藤吉郎ふじきちろ姑使者あやめしやと懇懃こんけんよりてあし其上そのうへあそ返答へんたうや  
 けあし仰越あやせこと一趣あつせん應おこその理聞ことわりきえひへこの退ひきて  
 愚案ぐあんと廻めぐらしゆつど畢竟御遠慮おんえんの足たぐざる所ところと存  
 け抑信長おさしんぢやう苟も公方家くわうけの執權しやくけんとて天下てんかの仕置しぢぢと預あづかり  
 け身みあつゆつと偽いつはりとやべらんや勅定ちやくぢやうとゆひ台  
 命めいとしひ一旦誓ちかひし詞ことばと何なにとて違夔いひんのゆづる朝  
 倉淺井くらあさいの御家ごけよて々々輕々かろ敷思召おぼしめささるるあや信長  
 け家けよてい禁裏きんりと尊崇そんじやうはと公方くわうと重んおもぶ奉ほうさると  
 一形ひとがたあつび去さば坂本さかもとの對陣たいぢん言甲斐いひがひあく六十餘日  
 の光陰くわういんと送おくさるる神速しんそくと陣拂ぢんはらひひしと他家たけけの朝あさ

けあつりしべゆひと然しかし何なにとて誓ちかひ破やぶさるる  
 る當時攝州たうじの敵等てきとう并ならぶ本願寺宗門ほんげんじそうもんの一揆いつぎむら誅  
 伐つちあらんこと思おもひ立たちあつ江州路かうぢうぢへ人數にんずとさし向  
 ひとと憚おそり存ぞんびるか故ゆゑと黙止もくぢさるる処ところは是等せんとうけ  
 以もても信長しんぢやうの疎畧そしやくと存ぞんぶとさるることを量はかり知しるふ  
 べし叔しやく又磯野丹波守いそのの車元くるまもとより淺井あさいの御家ごけ來きるとも  
 承うけり不ふし一旦御旗ごひしの下したに立たちし存ぞんびへむ和  
 睦わむつの上うへに敵味方てきあひの差別さべつふ及およぶ殊ことふい將軍しやうじんより  
 召めいさしたるふと信長しんぢやう何なにとて支さえりべし高たか島しまの城ぢやうへ  
 公方家くわうけの御錠ごぢやうよて下置かみぢと一処ひとところあり是こゝに信長しんぢやうが  
 意いあて故障こしやう中なべさるるにあつ佐和山さわやまの城ぢやうと信長しんぢやう

不預けの由仰下されたるべし人数とて置てい  
 の全信長が私の計より然るも磯野が老  
 母と礫の上らと一何ある理よていぞや公方家  
 へ召れしことを嫉ましく思はれての御計よてい  
 浅井殿の公方家を軽んずるも中づく存い之  
 然此方より使者と参らきて此事と承る  
 ちやと存つれども和平の後のいよ遠くは事  
 と起るに似たりと思慮仕て差扣まうりある処  
 大尾の城の城主開退て空虚あるは見て山  
 賊強盗あとの棲とあるも計はるるよその用  
 心とていささか士卒とさ遣る守護いささ

せいの浅妻の城に新庄駿河守この城成るべき  
 力あつて因て小谷へ加勢と遣していへどもい  
 まど差越はひ暫の間め呉の様よと頼ゆよ  
 了て假ふめへいゆの其行と以て三ヶの城と  
 取りあど仰越るる近頃迷惑仕る併浅井家  
 盟約違變ありあんとあつてそれらを違勅の犯  
 人ありぬ武命と輕ト争乱とこのあふと此方よ  
 了異見を加えしとあつていぬぬども國の騷動民  
 の困窮といささあつて願ふに誓紙を守りて  
 穩便の沙汰とありぬ信長よ於て塵芥をうりも  
 踈意いささと理と盡して挨拶あそば浅井が使者

Ichigane Hangarai

Yoshikata Roshaku

大階記四編卷十二

も道理<sup>どうり</sup>に伏<sup>ふ</sup>して返<sup>かへ</sup>るべし詞<sup>ことば</sup>もあく暇<sup>いとま</sup>と告<sup>つげ</sup>て立<sup>た</sup>帰<sup>かへ</sup>  
了<sup>り</sup>藤吉<sup>とうきち</sup>郎<sup>らう</sup>が返<sup>かへ</sup>答<sup>こたへ</sup>の趣<sup>おもむき</sup>委<sup>あやま</sup>細<sup>こま</sup>に長<sup>なが</sup>政<sup>まさ</sup>へ達<sup>たつ</sup>しけるよ長<sup>なが</sup>  
政<sup>まさ</sup>心<sup>こころ</sup>弥<sup>いよいよ</sup>いりり彼<sup>かれ</sup>が返<sup>かへ</sup>答<sup>こたへ</sup>一<sup>ひと</sup>く我<sup>われ</sup>と謗<sup>とが</sup>すべの<sup>こと</sup>是<sup>こゝ</sup>信<sup>のぶ</sup>  
長<sup>なが</sup>と言<sup>い</sup>合<sup>あ</sup>せ我<sup>われ</sup>領<sup>りやう</sup>分<sup>ぶん</sup>と縮<sup>ちぢ</sup>め不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>に軍<sup>いくさ</sup>と起<sup>おこ</sup>せん時<sup>とき</sup>たよ  
うよめ<sup>め</sup>ん為<sup>ため</sup>と計<sup>はか</sup>る先<sup>まづ</sup>むる時<sup>とき</sup>人<sup>ひと</sup>を制<sup>せい</sup>し後<sup>あと</sup>る  
ふ時<sup>とき</sup>人<sup>ひと</sup>を制<sup>せい</sup>せらる<sup>らる</sup>早<sup>はや</sup>く此<sup>こゝ</sup>方<sup>かた</sup>より事<sup>こと</sup>を<sup>し</sup>め  
不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>表<sup>ひょう</sup>裏<sup>り</sup>の者<sup>もの</sup>共<sup>ども</sup>とあ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>討<sup>うち</sup>捕<sup>とら</sup>べしと思<sup>おも</sup>へど  
を小<sup>こ</sup>谷<sup>や</sup>の勢<sup>せい</sup>と分<sup>わ</sup>り川<sup>がわ</sup>より人<sup>ひと</sup>と人<sup>ひと</sup>あ<sup>あ</sup>とへ却<sup>かえ</sup>て思<sup>おも</sup>慮<sup>り</sup>を  
さ<sup>さ</sup>に似<sup>に</sup>たり近<sup>まじ</sup>郷<sup>きやう</sup>の土<sup>ど</sup>民<sup>たみ</sup>等<sup>ら</sup>と語<sup>かた</sup>らる<sup>らる</sup>も江<sup>え</sup>南<sup>なん</sup>の  
百<sup>ひゃく</sup>姓<sup>せい</sup>等<sup>ら</sup>の六<sup>む</sup>角<sup>かく</sup>義<sup>ぎ</sup>賢<sup>けん</sup>公<sup>こう</sup>方<sup>かた</sup>家<sup>け</sup>の御<sup>おん</sup>味<sup>み</sup>方<sup>かた</sup>とありて信<sup>のぶ</sup>長<sup>なが</sup>  
よ懇<sup>こん</sup>志<sup>し</sup>と通<sup>とほ</sup>むるが故<sup>ゆゑ</sup>に頼<sup>たの</sup>むも從<sup>したが</sup>ふま<sup>ま</sup>如何<sup>いか</sup>の<sup>こと</sup>を

んと案<sup>あん</sup>ト煩<sup>わづら</sup>ひけるが一<sup>ひと</sup>川の謀<sup>まう</sup>畧<sup>りやく</sup>と案<sup>あん</sup>ト出<sup>い</sup>し石<sup>いし</sup>山<sup>やま</sup>  
本<sup>ほん</sup>願<sup>がん</sup>寺<sup>じ</sup>へさよ<sup>よ</sup>詞<sup>ことば</sup>を盡<sup>つ</sup>して頼<sup>たの</sup>む遣<sup>つか</sup>らる<sup>らる</sup>江<sup>え</sup>州<sup>しゅう</sup>の大<sup>だい</sup>  
坊<sup>ぼう</sup>主<sup>しゅ</sup>と催<sup>もよほ</sup>しけるよいづきも淺<sup>あさ</sup>井<sup>い</sup>又一<sup>また</sup>味<sup>あじ</sup>して織<sup>お</sup>  
田<sup>で</sup>家<sup>け</sup>の持<sup>もち</sup>城<sup>じやう</sup>と責<sup>せ</sup>んとする面<sup>めん</sup>くら箕<sup>み</sup>浦<sup>うら</sup>の誓<sup>ちか</sup>願<sup>がん</sup>寺<sup>じ</sup>門<sup>もん</sup>  
徒<sup>と</sup>四<sup>し</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>新<sup>しん</sup>庄<sup>じやう</sup>の金<sup>きん</sup>光<sup>こう</sup>寺<sup>じ</sup>二<sup>に</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>朽<sup>く</sup>木<sup>ぼく</sup>の常<sup>じやう</sup>願<sup>がん</sup>寺<sup>じ</sup>  
一<sup>ひと</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>上<sup>じやう</sup>路<sup>ろ</sup>の順<sup>じゆん</sup>慶<sup>けい</sup>寺<sup>じ</sup>五<sup>ご</sup>百<sup>ひゃく</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>由<sup>ゆ</sup>須<sup>す</sup>木<sup>ぼく</sup>の清<sup>せい</sup>願<sup>がん</sup>寺<sup>じ</sup>  
二<sup>に</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>増<sup>ま</sup>田<sup>でん</sup>の真<sup>ま</sup>宗<sup>そう</sup>寺<sup>じ</sup>三<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>唐<sup>たう</sup>川<sup>がわ</sup>乃<sup>の</sup>超<sup>てう</sup>照<sup>せう</sup>寺<sup>じ</sup>八<sup>はち</sup>  
百<sup>ひゃく</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>長<sup>ちやう</sup>沼<sup>ぬま</sup>の福<sup>ふく</sup>田<sup>でん</sup>寺<sup>じ</sup>四<sup>し</sup>千<sup>せん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>下<sup>げ</sup>坂<sup>さか</sup>の福<sup>ふく</sup>照<sup>せう</sup>寺<sup>じ</sup>三<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>  
餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>都<sup>と</sup>合<sup>が</sup>二<sup>に</sup>万<sup>まん</sup>餘<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>蜂<sup>ちち</sup>の如<sup>ごと</sup>くよ起<sup>おこ</sup>りし<sup>し</sup>バ長<sup>ちやう</sup>政<sup>まさ</sup>大<sup>だい</sup>  
に悦<sup>よろこ</sup>び即<sup>すなは</sup>軍<sup>ぐん</sup>の奉<sup>ほう</sup>行<sup>かう</sup>よ中<sup>なかつ</sup>島<sup>しま</sup>日<sup>ひ</sup>向<sup>むか</sup>守<sup>まも</sup>淺<sup>あさ</sup>井<sup>い</sup>七<sup>しち</sup>郎<sup>らう</sup>野<sup>の</sup>村<sup>むら</sup>  
兵<sup>へい</sup>庫<sup>こ</sup>頭<sup>づ</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>と著<sup>ちやく</sup>添<sup>せん</sup>よづ堀<sup>ほり</sup>の次<sup>つぎ</sup>郎<sup>らう</sup>が籠<sup>かご</sup>る<sup>らる</sup>鎌<sup>かま</sup>の

大階記四編卷十二

五

Toranosuke  
Katonu ist sehr stark

又の城を責めんとて五月六日箕浦誓願寺門徒を案内者として先陣を進ませ一揆の總勢二万餘人となり堀が後見多羅尾右近樋口三郎兵衛隨卷攻付たり堀が後見多羅尾右近樋口三郎兵衛隨分粉骨と盡して防が戦ふと云ども敵ハ雲霞の如く目よあまる大軍あり地下人あがるも入替く息とも續をば攻けるわざ城兵五百餘人防禦の術は失ひ既又危あく見へたりけり木下藤吉即此由を聞後援せで叶ふまどらありへども折ふ一兵士とくあくるづう二千ふ足ざうと城沖ふ千餘人の残し置八百餘人と引率し鎌の刃乃後攻の為

ふと打て出けるか從兵ともみ向てやける様敵の大勢あがる郷民どもの集り勢なり中よハ野武士あぶもあるべあれは大将いけりとも一向宗門の坊主よて其家あり軍の掛引心よくうづ但追崩して駈らるるを首と取ても何うせん堅様横様十文字と蹴ららるる下知しける加藤虎之助福島市松片桐助作堀尾茂助等いづれも一騎當十の勇士あれは承らうていたる敵ハ鬼神ありとも我等が向ふて勝ぬと云ふとやいづれ御心安かき只一めこれ蹴破して棄んと我くが手の内みいや勇悦び真先と進ける秀吉のさ縁て下知し

大岡巴四編卷十二

六

けり味方の旗さしもの袖印まで取めく一揆  
原の勢は緩き一休よめてあし油断を間近くか  
けてのち旗ともさし袖印とも付し掛るも引も我  
下知と守りて違ふとかうれと懇み言諭しとふん  
で馳せりけり一揆原二万餘人稲麻竹葦の如く取  
かこめ叫喚んで責立最中あれば木下が勢の近川  
くと夢も知どたあく見付しめのも旗さしめの  
見らるるは一定味方の一揆の後をさし來る  
あしんと心もあはれありけるも既ふそのあし  
弓杖七八段とあり一頃五色の吹貫に瓢箪の馬印  
と立て木下藤吉郎秀吉ありと大音聲ふよばく

是遅兵八百餘人潮の湧く箕浦の誓願寺が四千  
餘人の真中へ突めり加藤片桐福島堀尾中村蜂須  
賀が葦面もあはれ戦あはれりげれを烈しと働ふ  
ふが中あも加藤虎之助清正一番み切入ら加藤が  
郎等木村又藏清正が前よ立て一揆原と切ふを蹴  
たとし主従相並で勇猛に振舞はんあはれ所へ行如  
く四方八面に馳通る忽十四五人を切伏次よ扣へ  
し福田寺が四千餘人へ切めければ是も同トく  
切靡けらる右往左往に敗走はるその次乃福照寺が  
三千餘人これと見え入替んとあせしむも福田寺  
が敗兵よ引立られ共よ狼狽して敗走はる秀吉勢ハ

あれ等と追捨よあし真宗寺が三千餘人よ攻め、  
 切立掛たてとともよありをねべ一揆原肝と寒  
 一戦あべさ義勢もあく崩と立中を開きて通ける  
 により秀吉勢ハ勝よのりその次よ備へ清願寺  
 が二千餘人ハ切崩を其跡よ續さし順慶寺が五  
 百餘人一支もさへえび逃たりけを次よ立常願  
 寺が一千餘人今ハ叶まると逸足出引とて城  
 中より多羅尾樋口をさゆ木下よ力と合とてやと  
 五百餘騎真黒よ打て出て箕浦の門徒と切伏突伏  
 手痛く戦へし秀吉勢ハ一揆原と十分よ切散し氣  
 色よげよ打笑し多羅尾樋口よ一手ふありて追

立駈たて下坂表の海際まで切拂ひ勝開あげて引  
 めしととの有様ひとへ天帝の魔王と打破りし  
 をめくやと見へておびたし郷民共の一揆とら  
 りへ二万餘人の大勢とらづめ八百餘人よ切崩  
 しける木下が武勇のむと漢土の韓信我朝の九  
 郎義經よ比ぶるとも恥めしと敵も味方も  
 一様にむめぬのめをあらうけを去わさし秀吉  
 を討らる所の首共を實檢しけるにゆきも土民  
 のことあれが岐阜へさし送るよ及むびたし合戦し  
 たる験よとて耳鼻と殺て使者よ付注進せしゆら  
 信長軍の次第と聞食秀吉ハ智謀のよありし勇猛

Toukyuzero Kinoshita

Nagamasa

大階記四編卷十二

へしてあうも不敵の者あがらるる敵の式まで心得  
 へ近頃得がこと侍あかともむ 称美あしあふ  
 詩大雅攸馘安々の註小軍法獲而不服則殺而獻  
 其左耳といひ尔足註小以獲賊耳為馘と云  
 信長長島へ出馬の事  
 并多藝口引取柴田難戦の事  
 江州一揆起りて合戦及ぶと浅井家より催促  
 せし所と聞えしうは扱あを長政あらへる手  
 出たるゆゑのあは然に此方より出馬あるべし  
 と信長下知ありあひらると木下藤吉郎承りて今  
 暫く御見合ありて然るべしと言上を以て江

州發向いより止まりり爰尾州勢州の境ある長  
 島の一揆ども去年坂本對陣の折より織田彦七郎  
 と討し事言語道断あは事あり此節いさめ手  
 明あれは長島へ出馬し本願寺門徒といはく誅伐  
 をてして五月十日玩繩五万餘人を引率し三道  
 に分けし押寄るまゆ中通り佐久間右衛門尉  
 浅井新八郎山田三左衛門津田市之丞長谷川丹後  
 守和田新助中嶋豊後守といはく一万余人  
 西美濃多藝山の麓より長嶋へ押寄るゆゑの柴田  
 修理進氏家ト全入道市橋九郎左衛門安藤伊賀守  
 稻葉伊豫守飯沼勘平九毛兵庫頭不破河内守等二

大階記四編卷十二

九



万餘人とて信長の旗本の二万餘人今日津島ま  
 で出張ありて森嶋五明の火とゆひて焚立長嶋の  
 容子と伺ふる地形要害よろしく殊に敵の大勢を  
 了勿く一旦に攻破るべくと見へたりけり然る  
 に信長たしかに巡見ありとられ一揆共のことあり  
 多勢なりとも何れとの事うありんと兼ていあひ  
 ひ川の今能く窺ひ見るとい軍に馴たる者どもと  
 見え隊伍もいと嚴重な法令も整ひたり無体な責  
 たらんよ味方損亡多あり然者今度は一ま  
 川退陣ありて重なる出陣あるべき旨と觸られ俄  
 に軍馬とありてあふまらう両口より向ひ一軍勢

を早く退陣し長嶋あてり信長出馬の由と聞くと  
 のより近隣近郷の門徒と語らるる雲霞の如くそ  
 せ集り防戦の用意取り最奇く奇兵とあそく  
 信長をうごくと謀りける信長その機とさうとて  
 やく退陣ありあへば中嶋口の勢に無事退たり  
 けふが多藝口の寄手二万餘の勢といひ大将柴田  
 修理進さる勇猛の大將あるが故に敵陣ちり寄  
 ろがう一戦もせび引退くとの無念に信長の使  
 來うて退陣の由と告るといへども急は引返さん  
 としとてさうらう長嶋の一揆の内のもやうとの  
 者共より柴田を喫止んと前後左右よりひりく

と責付たり柴田ハ二万餘人を操引し引退勝家一  
番ハ後殿して引けるを一揆とさすもあく攻寄の  
あそよどらと戦ふる此軍いりも難義ありけ  
どは何とらけん柴田が金の御幣の馬印を一揆  
ども棄これけり一揆の中ハ山田藤大夫云大  
膽不敵の野武士ありけるが御幣の馬印を差あげ  
織田家の大将柴田修理進我等が勇氣にあそれて  
降参ありしそあそを見て疑をもちしそや降参を  
よやと呼らうけれバ一揆一同ハ咄と笑ふ勝家聞  
て大ハ驚るゆ川怒り馬印とらばられて何の面目  
に退べらざと云らうとや引返しけるが鉄炮の

疵の痛あらうあて馬上ハ合期をさうりけるそらて  
即等誓し取つそその儘に退とあつと諫むると耳  
みも更し聞入に獅子奮迅の怒と起し我若年のむ  
あしうらう數度の軍ハ逢て難義の殿とら度くそ  
れども今日の如く不覺と取しとあしその上敵ハ  
そよれ一揆原に追と味方とらせ馬印を取と  
しと未代迫の耻辱あり馬印と取し得むは爰  
よて討死をんとありけるとらて二陣ハひうへ  
安藤伊賀守らせ來り柴田殿ハ手負あらしあらし  
を某請取やべしそや退をむとそあれども勝  
家更し聞入をかの馬印ハ人も知たる五幣あり敵

乃手<sup>て</sup>又<sup>また</sup>ころころして<sup>して</sup>い<sup>い</sup>某<sup>それ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>耻<sup>ち</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>び<sup>び</sup>止<sup>と</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ふ  
あ<sup>あ</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>切<sup>き</sup>て<sup>て</sup>馳<sup>ち</sup>出<sup>し</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>勝<sup>しょう</sup>家<sup>け</sup>の<sup>の</sup>小<sup>せう</sup>性<sup>じやう</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ける<sup>る</sup>毛<sup>めん</sup>  
受<sup>う</sup>勝<sup>しょう</sup>助<sup>すけ</sup>照<sup>しょう</sup>景<sup>けい</sup>生<sup>せい</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じゅう</sup>七<sup>しち</sup>歳<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>出<sup>い</sup>て<sup>て</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>御<sup>おん</sup>馬<sup>ま</sup>印<sup>いん</sup>  
と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>返<sup>かえ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>ど<sup>ど</sup>く<sup>く</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>み<sup>み</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>敵<sup>てき</sup>も<sup>も</sup>渡<sup>わたり</sup>  
ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>用<sup>もち</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>べ<sup>べ</sup>ー<sup>ー</sup>さ<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>御<sup>おん</sup>心<sup>しん</sup>と<sup>と</sup>苦<sup>くる</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>某<sup>それ</sup>は<sup>は</sup>御<sup>おん</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>ー<sup>ー</sup>無<sup>ぶ</sup>事<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>  
御<sup>おん</sup>耻<sup>ち</sup>辱<sup>じやく</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>様<sup>よう</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ひ<sup>ひ</sup>や<sup>や</sup>べ<sup>べ</sup>ー<sup>ー</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>捨<sup>すて</sup>壘<sup>れい</sup>を<sup>を</sup>  
脱<sup>だつ</sup>袖<sup>しゆ</sup>印<sup>いん</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>大<sup>だい</sup>童<sup>どう</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>馳<sup>ち</sup>出<sup>し</sup>り<sup>り</sup>ける<sup>る</sup>  
が<sup>が</sup>一<sup>いつ</sup>揆<sup>くわい</sup>ご<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>勢<sup>せい</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>馬<sup>ま</sup>印<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>て<sup>て</sup>段<sup>だん</sup>々<sup>々</sup>  
に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>來<sup>き</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>川<sup>がわ</sup>と<sup>と</sup>混<sup>まじ</sup>り<sup>り</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>山<sup>やま</sup>田<sup>でん</sup>藤<sup>とう</sup>太<sup>たい</sup>夫<sup>ふう</sup>  
か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>も<sup>も</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>見<sup>み</sup>へ<sup>へ</sup>ける<sup>る</sup>が<sup>が</sup>抜<sup>ぬ</sup>打<sup>うち</sup>は<sup>は</sup>藤<sup>とう</sup>太<sup>たい</sup>夫<sup>ふう</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>

倒<sup>たふ</sup>し<sup>し</sup>馬<sup>ま</sup>印<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>肩<sup>かた</sup>ふ<sup>ふ</sup>打<sup>うち</sup>め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>げ<sup>げ</sup>右<sup>みぎ</sup>手<sup>て</sup>は<sup>は</sup>大<sup>だい</sup>太<sup>たい</sup>  
刀<sup>やいば</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>近<sup>ちか</sup>付<sup>つけ</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>薙<sup>は</sup>ふ<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>切<sup>き</sup>め<sup>め</sup>せ<sup>せ</sup>韋<sup>わい</sup>駄<sup>だ</sup>天<sup>てん</sup>の<sup>の</sup>  
如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>み<sup>み</sup>を<sup>を</sup>帰<sup>かへ</sup>り<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>揆<sup>くわい</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>大<sup>だい</sup>勢<sup>せい</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>  
追<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ひ<sup>ひ</sup>川<sup>がわ</sup>を<sup>を</sup>走<sup>は</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>味<sup>あじ</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>勢<sup>せい</sup>  
と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>馬<sup>ま</sup>印<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>一<sup>いつ</sup>人<sup>にん</sup>取<sup>と</sup>  
て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>一<sup>いつ</sup>揆<sup>くわい</sup>原<sup>げん</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>合<sup>あ</sup>火<sup>ひ</sup>水<sup>すい</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>戦<sup>いくさ</sup>ふ<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>  
勝<sup>しょう</sup>家<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>見<sup>み</sup>付<sup>つけ</sup>勝<sup>しょう</sup>助<sup>すけ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>共<sup>ども</sup>と<sup>と</sup>大<sup>だい</sup>い<sup>い</sup>  
ら<sup>ら</sup>だ<sup>だ</sup>ち<sup>ち</sup>下<sup>げ</sup>知<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>柴<sup>しば</sup>田<sup>でん</sup>が<sup>が</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>一<sup>いつ</sup>同<sup>どう</sup>に<sup>に</sup>馳<sup>ち</sup>さ<sup>さ</sup>こ<sup>こ</sup>  
ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>馬<sup>ま</sup>印<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>勝<sup>しょう</sup>家<sup>け</sup>の<sup>の</sup>馬<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>  
し<sup>し</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>勝<sup>しょう</sup>助<sup>すけ</sup>に<sup>に</sup>援<sup>えん</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>一<sup>いつ</sup>揆<sup>くわい</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>へ<sup>へ</sup>切<sup>き</sup>て<sup>て</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>安<sup>あん</sup>藤<sup>とう</sup>  
伊<sup>い</sup>賀<sup>が</sup>守<sup>しゅ</sup>荒<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>を<sup>を</sup>以<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>け<sup>け</sup>付<sup>つけ</sup>一<sup>いつ</sup>聲<sup>せい</sup>さ<sup>さ</sup>け<sup>け</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>切<sup>き</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>毛<sup>めん</sup>受<sup>う</sup>こ

Kagunke  
Diten

大陪記四編卷十二

とよ力と得て遂に一揆と切りらり事故あり引うへ  
を柴田あきつりのうれしき勝助が手を取て涙と  
あがり汝年若あはれとも知といひ勇といひ多く得が  
た侍うを勝家が馬印と取りて一耻辱とてとらうと  
手柄とやいそん名譽とやいそん何と以て賞美とる  
ともあはれとて當座のあはれにとて勝家の字とつけ  
て勝助家照とあはれとせ是はううて毛受といとて  
たのしきとてのさあひひとて

毛受氏熱田大宮司の二族野田太郎清兵衛の孫毛受八郎朝重の後尾張國  
春日井郡稻葉村の八十二歳う勝家よ仕しとて永禄九年と  
重修真書太閤記四編卷之拾二終

知る兄と茂  
左衛門尉云

